琉球大学学術リポジトリ

現象を通して構造を学ぶ「日本事情」クラスの試み

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学留学生センター
	公開日: 2010-07-23
	キーワード (Ja): 文化, 現象, 構造, 中立的視点
	キーワード (En):
	作成者: 石原, 嘉人, Ishihara, Yoshihito
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17610

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育　第7号，2010

現象を通して構造を学ぶ「日本事情」クラスの試み

石　原　嘉　人

要　旨

筆者は2008年度から共通教育科目の留学生対象の講義科目である「日本事情Ⅰ・Ⅱ」を担当することになった。一般に「事情」というタイトルを冠する科目は，体験学習や伝統文化の紹介を中心に据えた内容であったり，歴史や地理，文学などの知識を提供する内容であったりすることが多いようであるが，筆者は「現象を通して構造を学ぶ」ことを柱とした日本事情のあり方について模索した。小論は2008年度秋学期に実践した内容を振り返りつつ記述するものである。

この科目は従来留学生のみを対象としていたが，この学期から法文学部の「日本語教育副専攻課程」を構成する科目の一つとして，日本人学生も履修することになった。このことによって授業の内容や進め方に一定の制約が生じた反面，両者にとって有効となりうる新しい講義スタイルの可能性が開拓できた。

【キーワード】文化，現象，構造，中立的視点

0. はじめに

本学においては，留学生対象の共通教育科目群（日本語・日本事情）の一つとして「日本事情Ⅰ」（前期），「日本事情Ⅱ」（後期）が開講されている。受講者は読解，聴解，記述，発話などの諸能力において日本語の上級学習者と見なされた留学生であり，日本語を用いて日本の文化や歴史，社会事情などを学ぶためにこの科目を履修する。

これとは別に，法文学部の「日本語教育副専攻」課程の一つとして提供されている「日本事情」という科目がある。この科目は，2008年度の後期より留学生対象の「日本事情Ⅰ」または「日本事情Ⅱ」との合併授業ということになった。

筆者は2008年度の前期よりこれらの科目を担当することになり，実践を行いつつ新たな授業スタイルを模索した。小論はこの経験を踏まえて，留学生のみを対象として行う講義形式の授業と，日本人学生と共に学ぶディスカッション形式の授業とを対比したうえで，後者の持つ教育効果について検証するものである。

1. 講義形式の授業

前期「日本事情Ｉ」では，25名の留学生を対象に，いわゆる講義形式で授業を行った。具体的には，日本文化の基層構造を分析したテキストを読ませ，その内容を吟味することが主な授業内での活動であった。日本を特徴づけている原理－「中空構造」，「同化圧力」「ノンバーバル・コミュニケーションの優位性」など－を分析することを通して，文学，社会，芸術，日常生活など，日本社会の様々な局面について，より深い理解に導くことを狙ったのである。

しかし，この方法はあくまでも「机上の論理」に拠るものであり，抽象レベルで想定された「平均的な日本人」像を語ることしかできない。当然のことながら，社会というものは様々な個性を持った人間の集まりであり，個性の多様さを内包する。したがって，留学生たちが日本で実際に見たり聞いたりする出来事には，「日本では典型的な事例」だけでなく，「日本らしさが反映されていないケース」も含まれる。しかしながら，講義形式の授業では，どうしても学生自身の生活実感を踏まえた「気づき」を与える場というよりも，識者によって加工され調味された既成の情報を一方的に流し込む場になってしまいがちである。

授業は筆者の想定どおり順調に進行し，学生の反応も悪くなかったが，自分の解釈した日本社会の有り様がそのまま学生たちに受け入れられてしまうことに対しては，常に居心地の悪さを感じた。この違和感は担当教員により提示された事象が日本を代表してしまうことの危うさに立脚するものであり，担当教員の主観の範囲内でしか学べないことを危惧したものである。また，この方法では，留学生が日常生活を通して体験する出来事と授業内容が密接に関連しているとは言いがたいため，日本に留学しているという利点を十分に生かせていないのではないかという懸念も生じた。その結果，このような事態を如何にして回避するかが課題として浮かび上がったのである。

この課題は，日本における文化的状況を「多様性を内包しつつも一定の傾向を見せ，時代によって変化しつつも一定の方向付けが窺える」ものとして提示することによって解決できるはずである。熟慮を重ねた結果，日本人学生と合同で授業を行い，日本人学生との議論を通して自らの力で同様の理解に辿り着くようにすれば，より実感の伴う理解が得られるのではないかと考えるに至った。つまり，留学生にありのままの日本事情をより深く実感させるには，最初から出来合いの理論を教えるのではなく，現象の多様性を認識しながら背後にある構造を捉えるための訓練を行う

のである。

たとえば，どのような関係におけるどのような言葉遣いや態度が「生意気」とみなされるのか。日本人が家庭，職場，友人，恋愛などに対して期待し求めているのは何か。日本人の生活のなかで宗教がどのような位置を占めているのか。このように，議論に値するテーマには事欠かない。

このような授業を行うことは，日本人学生にとっても有益であると思われる。なぜなら，このような形式の授業は，留学生の眼に映った「異文化としての日本」を知ることにつながるからである。このことは，とりわけ日本語教育副専攻科目として履修する学生にとって有効であることが予想できる。なぜなら，このような経験は，日本語教育の現場に立ったときに学習者の目から見た「ニホン」を理解する足がかりを得ることにつながるからである。

ちょうどそのような折に，法文学部の「日本語教育副専攻」コースの見直しが行われ，このコースで提供される科目群の更なる充実が求められた。そこで，後期「日本事情Ⅱ」では「日本語教育副専攻」コースを選択した日本人学生を授業に参加させる形で授業を行い，特定のテーマについて各自の意見を開陳しながら議論を重ねることで彼我の思考パターンの背景を形作るパースペクティヴの違いを浮かび上がらせるような授業を提示することになったのである。これは，筆者にとって未知の体験であると同時に，これまで筆者が抱いていた固定概念では捉えきれなかった「若者の目で切り取った日本像」を知る貴重な機会でもあった。

2. 日本人学生を媒体として活用した授業

秋学期は，10名の日本人学生と22名の留学生が同じクラスで「日本事情」を学ぶことになった。日本人学生の「日本事情（二単位）」と，留学生の「日本事情Ⅱ（一単位）」の相互乗り入れ方式の開講科目というわけである。[(1)]

この授業では，個人の意見を出しやすいように，まずは全体を5～6名ごとのグループに分け，小グループの中で議論させた。30人の前で自分の意見を述べるということは，ほとんどの日本人学生にとってハードルが高すぎると予想したからである。各グループには進行役として指名された日本人学生が1名以上存在し，この学生がグループ内の意見を取りまとめて全体に向けて報告するわけである。これに対して全体から質問や意見を寄せてもらい，再度議論を重ねたり，筆者がコメントや説明を補足したりすることにした。グループのメンバーはなるべく多様な文化的背景を

持つものが集まるようにあらかじめ決めておくが，毎週メンバーを入れ替えて顔ぶれが固定しないようにした。

最初の授業では，この変則的な科目の進め方を説明した上で，さっそくグループ・ディスカッションを行った。最初のテーマは，

[1] 少年マンガの主人公は，どんな容姿・性格をしているか。そのライバルは？

[2] 日本の映画やドラマで大事な告白をする場面って，どんなシチュエーション？

[3] ある人から一万円を渡されて「日本らしいものを部屋に飾りたいので，あなたが日本らしいと思うものを買ってきてくれないか。」と言われたら，何を買う？

というものであり，様子を探る意味も含めて30分ほど自由に議論させた。

最初はおずおずと自己紹介していた学生たちも，すぐに打ち解けて好きな漫画や映画，ドラマなど共通の話題を見つけて盛り上がった。その間，筆者は会話が続かないグループがいたら話題を振ろうと思いつつ巡回していたが，ほとんど何もしないで観察するだけであった。進行役を委ねた日本人学生の力量が優れていたおかげではないかと思われる。

頃合いを見計らって議論を中断させ，各グループの進行役に，どんな話題が出たか発表させた。[1] [2]については，留学生たちが日本の漫画やアニメに非常に詳しいことが新鮮だったようで，このクラスの目標である「現象を通して構造を探る」ところまで議論は深まらなかったものの，icebreakerとしての機能は果たせたようであった。[3]については，日本人学生と留学生の間で認識のギャップが大きかったという例がいくつも報告された。

第一週目に各グループの発表を聞いた上で，第二週目にこのクラスの目標である「現象を通して構造を探る」ことについて，具体例を示した。

例えば，[1]については，少年漫画の主人公とそのライバルの外見をいくつか例をあげて紹介し，黒目の大きさ，眉の太さ，輪郭などの共通項を指摘して，ヒーロー像あるいはライバル像に対して特定のイメージが付与される傾向があることを確認した。その上で，「典型的な縄文人」と「典型的な弥生人」の想像図を見せ，多くのヒーロー像が縄文人と同じ外見的特徴を備えていること，多くのライバルの外見的特徴が弥生人と一致することを指摘して，日本の漫画の深層に「縄文人の弥生人に対するルサンチマンの発露」という構造が組み込まれている可能性を抽出してみせた。

[2]については，日本では大事な告白をする際に，話す側と聞く側が向き合うので

はなく，同じ方向を見ていたり，背を向けていたりすることが多いと指摘したのであるが，それに対して留学生から「タイのドラマでは，愛の告白はたいてい森の中で行われる。都会の話でも，旅行などで森に出かけた際に告白するのだ」「ヨーロッパではパーティーなどの楽しい場面でちゃんと向き合って告白するのが典型的だと思う」などという指摘があり，このクラスの目指す方向性－うっかりすると見過ごしてしまいそうな事象群の中から文化的な構造を抽出する－を示すことができた。

[3]については，日本人学生が「水墨画」「焼き物」などを「和風」イメージとして提示したのに対し，留学生の側からは「水墨画なら私の国にもある（むしろ本場だ）」という指摘があったり，買いたいお土産として「布団」「酒樽」「キティちゃん」など予想外の答えが出てきたりして，「日本らしさ」ということの前提を問い直すきっかけとなった。

3. 授業で取り上げたトピック

授業で取り上げたトピックは，「日本人の対人距離」「クリスマスの過ごし方」「寿退社」「寿退社」「専業主夫」など，基本的には一回の講義で完結するものを並べた。主なトピックは，以下の表の通りである。

日本人学生に対しては，これらのトピックに関するいくつかの質問を前の週に「10

表1　授業で取り上げたトピック

第 1 週	シラバス配布，進め方説明，お土産選び
第 2 週	マンガの構造，日本的なコミュニケーションの特徴
第 3 週	華道実習
第 4 週	美意識
第 5 週	色の好み
第 6 週	対人距離
第 7 週	プライベートな質問
第 8 週	クリスマスの過ごし方
第 9 週	寿退社
第 10 週	専業主夫
第 11 週	慣用句・ことわざ・ゼスチャー
第 12 週	成人式・県民性
第 13 週	日本人学生による発表「琉大生の恋愛事情」
第 14 週	日本人学生による発表「琉大生の恋愛事情」つづき
第 15 週	留学生による発表「私の異文化体験」グループごと

人アンケート」という形で与えておいて，自分の意見ではなく日本人10人の意見を紹介することを課した。これは，個人的な実感と一般的な傾向との間に違いが存在することを実感させることが第一の目的であった。また，10人分のアンケート結果を10人の日本人学生が発表すれば，100人分のアンケート結果に触れることになり，全体的傾向や意見のばらつきがリアルに感じられるであろうと考えてのことである。このような活動を通して，「私の意見」をそのまま「日本人の意見」として提示することの危うさを学んでいったものと思われる。

前述したように，授業時間中は5～6名の小グループに分かれ，各グループに日本人学生をひとり配置して，議論をリードさせた。日本人学生はアンケート結果を紹介しつつ，留学生たちから意見や感想を引き出して，整理して，グループ・ディスカッションの成果を最後に発表するのである。つまり，日本人学生は毎週新しい留学生と出会い，データに基づいたコミュニケーションを構築して，一定の結論を導き出す訓練を行ったことになる。

上記のトピックは，議論の際のどのようなトピックに関心が集まるかを見定めながら選択したのであるが，学生同士のディスカッションの過程で教員の思惑とは異なったところに重点が置かれることもあり，トピック選択そのものがインタラクティヴな状況の下で設定されることもあった。

学期が始まる前は，「美意識」「プライバシー感覚」など，抽象レベルで文化ごとに明確な傾向が現れる話題が好まれるであろうと予測していたのだが，実際には「琉大のキャンパスで恋人同士が手をつないで歩く姿を見かけないのはなぜか？」など，生活に根ざした素朴な疑問に対する解釈の違いに関心が高いようであった。そのため，大学生である彼らにとって身近な問題意識を喚起することを心がけて「クリスマスの過ごし方」「寿退社」「専業主夫」などのトピックを扱うことにした。これらの問題意識は，学期の終わりに琉大生の恋愛に対する意識を調査させ発表させるという結果をもたらしたのであるが，これは学期が始まる前には想定していなかった展開である。

この発表は，日本人学生に対して次のような課題を与えた。

> 『恋愛の社会学』（138-158）で取り上げている調査項目のうち一つ以上について，本学の学生20名を対象に，対面での聞き取り調査を行い，その結果を整理すること。

調査に当たっては，男女比を同率にするか，男性のみまたは女性のみを対象にしなければならない。日本人学生を主な調査対象としなければならないが，留学生を調査対象にすることは可能である。その場合は，かならず同数の日本人学生にも同じ調査を行い，その対比を明らかにして日本の若者の傾向が読み取れるようにすること。

こうした課題について授業時間に口頭で発表したうえで，3600字以上レポートにまとめて提出するように指示をしたのである。

教務課が実施しているアンケート調査とは別に，最後の授業の際に「どのトピックが興味深かったか？」という無記名のアンケート調査を行ったのであるが，回収できた24名の回答のうち四分の三にあたる18名が日本人学生による発表「琉大生の恋愛事情」に高い評価を与えていた。

なお，留学生に与えた課題は学期末のレポート(2)だけであり，毎回の授業では日本人学生からの働きかけを待って発話することが多かった。取得単位数の差を考慮しても，これは少し易し過ぎる課題だったかもしれない。日本人学生に与えたのと同様の調査を，せめて数回は課すべきであったと反省している。

4. まとめ

留学生を対象とする日本事情教育においては，学習者のニーズやクラスの構成に応じて様々な形態が採用されているが，今回実施したクラスの形態は，

①日本語上級者を対象としている（媒介語を使用しない）

②日本語教育副専攻の日本人学生を対象とする「日本事情」との合併授業である

③与える情報の内容を重視するのではなく，提示された現象の背後にある構造を理解するというプロセスを重視する

④実践を通して情報リソースとの距離感を把握し，認識の枠組みを獲得することを目標に置く

という特徴を持つ。

③と④は，②という制約から導き出された方策でもあるが，教員ひとりが日本人を代表して語るのではなく，日本人学生の多様な言説の中から傾向を読み取っていくことにより，

(1) 全体的な傾向と多様な個別性とのバランス感覚を身につける

(2) 現象を通して構造を理解するための訓練になる

(3) 具体的なエピソードによって深い印象を刻み込む

などの利点が見出された。

このことは，留学生にとっては「教員によってあらかじめ抽象化された情報ではなく，生の素材に触れて，日本人学生と共にそれを概念化する」という形で日本を理解することができるというメリットをもたらした。また，日本人学生にとっては「自明と思われていた現象や状況を外国人の視点から見直す」訓練となり，また微妙なニュアンスを日本語で説明する困難さを体験することもできたようである。

本学では，学生部教務課が毎学期受講者を対象に授業評価アンケートを実施しているが，その結果をみると，今回の試みに対して受講者は押しなべて高い評価を与えてくれたと言えそうである。以下に，教務課から送られてきたデータを転記する。5段階評価のうち，中立的評価を真ん中に，肯定的評価を右側に，否定的評価を左側に配して表にまとめた。[(3)]

初めての試みだったので，授業の進め方に慣れない学生が出てくるのではないか

表2　授業評価アンケートの結果

	全くそう思わない	そう思わない	どちらとも言えない	ややそう思う	強くそう思う
テキストや補助教材は適切であった	0	0	1	8	14
教員の説明はわかりやすかった	0	0	0	4	19
教員は学生を積極的に授業に参加させていた	0	0	1	1	21
授業の開始，終了時間は適切であった	0	0	0	3	20
目的や趣旨がはっきりしていて体系化された授業だった	0	0	1	5	17
教養や見識を養う上で得るところが多かった	0	0	0	10	13
学問に対する見方や考え方を深く学べた	0	0	3	6	14
この授業についていけた	0	0	0	8	14
心に残る良い授業であった	0	0	0	3	20
「大学で学んでいる」という実感が湧いた	0	0	0	4	19
この授業を受けて，学問に対する興味が増した	0	0	2	6	14
この授業を他の学生にも薦めたい	0	0	0	5	18
シラバス等に記されている達成目標に私は到達できた	0	0	1	6	14

総合的に判断して、この授業に満足している	0	0	0	4	16
教員の助言・指導は適切であった	0	0	0	6	9
この授業を受けて日本語が上達したと思う	0	0	1	6	9

と懸念していたが，このアンケート結果を見る限りでは杞憂に終わったようである。このことから，2008年度の後期に実施したこの試みは，留学生と日本人学生の双方にとって，非常に有効であったと思われる。

註

(1) 日本語教育副専攻科目の『日本事情』は取得単位数が2単位であり，1単位の科目『日本事情Ⅰ／Ⅱ』を履修する留学生と異なっているため，別に課題を与えなければならないと考えた。そこで，日本人学生の受講者にはアンケート調査などの課題を与えて発表させるとともに，グループ・ディスカッションの進行役等を務めさせることにした。

(2) 留学生には「『日本事情Ⅱ』の授業を通じて学んだこと」「日本文化の傾向と，私の対策（日本で暮らす際に心がけていること)」「日本人に伝えきれなかったこと（コミュニケーションに失敗した経験)」三つのテーマの中から一つを選ばせ，日本語で2400字以上の文章にまとめさせた。

(3) このデータは，受講した留学生22名を対象に学期末に行われたアンケートの結果であり，回答者数を数字で記している。アンケートの実施主体は教務課であり，学生の手によって教務課に回収・提出された。

使用教材一覧

柄谷行人（2003)『倫理21』平凡社

河合隼雄（1999)『中空構造日本の深層』中公文庫

佐藤直樹（2008)『暴走する「世間」』バジリコ社

谷本奈穂（2008)『恋愛の社会学　「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社

(琉球大学留学生センター)